

大学教育の質保証 ⑤

双方向ライブ型授業で「対面性」を追求する

大学院教育強化推進センター／高大接続・全学教育推進センター 市村 光之

2020年度は、新型コロナウイルス感染症の流行に伴い、遠隔授業を余儀なくされ、私たち教職員は試行錯誤の連続でした。筆者はキャリア教育担当として、Zoomを活用した双方向ライブ型授業を実施し、できる限り対面に近い授業運営を心がけました。今回はそれらの取り組みと、学生たちの受け止めについて報告します。

双方向ライブ授業で工夫したこと

筆者が担当するのは全学教育の5科目で、履修者数は各30～40名です。キャリア教育科目は知識の付与よりも、キャリア形成に係わる諸課題を「我がこと」として考える機会を履修生に提供することが肝要ですので、かねてより対話からの学びを重視し、ワークやディスカッションを多用する授業手法でした。また毎回、授業終了後は授業支援システムのアンケート機能を利用して、小レポート（授業からの気づき：400字）と質問、授業の改善要望を収集し、次回授業でフィードバックしています。まず、双方向ライブ型授業で実施したことについて紹介します。

■ 開講時：受講上の約束を周知・徹底する

Zoomを活用するにあたり、双方向性を担保するために、「顔出し」（ビデオ機能オン）を原則としました。顔出しは個人情報保護の観点でリスクが伴います。そこで、「受講に関する約束事項」を第1回授業で提示し、理解と協力を求めています。定めた主なルールは以下の通りです。

- ・必要に応じて「バーチャル背景」を設定する
- ・録画・録音したり、スクリーンショットを取らない
- ・第三者が視聴できる環境で視聴しない

■ 授業導入部：双方向性を意識させる

担当5科目で共通して実施している導入部を紹介します。

①Zoomにサインインしたらチャットに一言

授業開始5分前にサインインすることを推奨し、サインインしたら「今の気持ち」を一言、チャットで入力させます。「さっき起きたばかりです」「今日は晴天で気持ちがいい」「課題に追われて寝不足」など、思い思いのコメントが寄せられます。これは学生に授業に臨む心がまえをしてもらう作業であり、出席票代わりに学生の様子を知る手段でもあります。この時点ではビデオ、マイ

クともにオフです。

②授業開始：まず声を出させる

開始時間になったら、ビデオ、マイクをオンにさせ、全員で「今日もよろしくお願いします」など、挨拶します。オンライン上で発言するのは勇気がいります。まず声を出すことで、発言する授業であることを意識させます。

③最初の5～10分：フィードバックする

①のチャットをネタに軽く雑談してから、前回授業の復習もかねて小レポートや質問にフィードバックします。いくつか主要なものを取り上げる程度です。ネガティブ意見には必ず回答し、逃げないことを示します。改善できることはすぐ改善します。春学期の学生プロフィールでは、教員からのフィードバックの少なさが改善課題として挙がりました。全てに回答しなくても要所を押さえれば、そうした不満には繋がらないのではないのでしょうか。

以降、チャット機能は極力使いません。質問や意見があれば、対面の時と同様、発言するように促しています。チャットを活用すると学生からの質問等が活発になると言われますが、SNS的やり取りに慣れすぎて対面でのコミュニケーションを避けるようになっては本末転倒と考えます。

■ 授業：無理なく集中できるように構成する

たとえ興味のある内容でも、90分PC画面を見つめて授業を聴講するのは相当しんどいですので、配慮が必要です。

講義とワークを交互に配置する

各回の授業は2～3のパートに分けて、各パートは受動的に聴く時間と能動的に作業する時間（問題を解く、議論する等）を組み合わせます。たとえば、1つのパートを講義15分+次項で述べるワーク15分で構成します。

また、教員のPC画面は履修生をできるだけ多く表示できるようにします。対面の教室のような空気感は感じられませんが、多少なりとも履修生の反応が窺えます。



休憩、気分転換の時間を設ける

目の疲れや集中力の途切れを訴える履修生は少なくありません。休憩時間（3分）を1回設け、ビデオをオフにして席を立てて体をほぐすよう促しています。

春学期の担当科目は新入生対象でした。大学のキャンパス風景をスマホで撮影し、1分ほどのビデオクリップにして流し、気分転換を図ったりもしました。

■ ワーク類：段階を踏んで参加しやすくする

オンライン上では、お互いの感情が読み取りにくく、発言のタイミングもつかみにくいです。発言者が偏ったり、全員沈黙にならないよう、以下のような手順を進めています。

①個人ワーク：まず、自分の考えをまとめる

個人で考える時間を3分程度設け、議論するテーマに関して話すことをまとめさせます。教員は、この間にブレイクアウトルームに分ける準備をします。

②グループワーク：進行の仕方を指示する

自分の考えはまとまっても、いざグループに分かれると発言のきっかけが掴みにくいようです。まず順番に全員が意見を述べてからその先は自由に発言するよう指定したり、グループ内で持ち回りで司会進行させたりします。

テーマによって、グループに分かれる前に投票機能を使って、賛成/反対など選ばせます。議論の際、「私は〇〇を選択した、その理由は…」というパターンで話すよう指示することで、発言が苦手な履修生も発言しやすくなります。

グループワーク中、教員は各グループを巡回（状況を見守る）します。教員の顔が画面に現れると、履修生たちは身構えてしまいますので、ビデオはオフにしています。

③全体シェア：段階を踏んで発言を促す

ワーク後の全体シェアの際、全員に意見を求めても、対面の教室以上に履修生はなかなか発言してくれません。意見がないわけではなく、発言のきっかけが掴めないだけですので、最初は教員が指名します。数回、授業回が進んだら、グループを指名して代表者に発言を促します。さらに数回、授業回が進んだら、指名はせずクラス全体に呼びかけ発言を待つようにします。段階を踏んで進めると、自発的に発言してくれるようになることが多いです。

履修生の授業評価、受け止め

期末に全学で実施する授業アンケートの結果は、担当5科目の総合満足度が3.7~3.8で、対面時とそんな結果でした。自由記述の主なコメントは以下の通りです。

- 徹底して双方向にこだわっているのが刺激的で充実
- 教員からフィードバックが毎回あり、議論の場が2回は必ずあり、モチベーションにつながった
- 最初は抵抗があったが、顔出しすることで受講生の態度や意欲が他の授業に比べてよかった
- ディスカッションは、相手を察するのが難しく、初めは話しにくかったが、段々話せるようになった

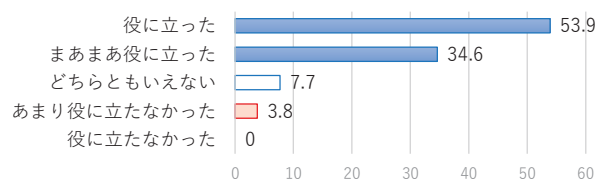
双方向ライブ授業で筆者がしてきたことは、対面授業で実践していたアクティブ・ラーニングの手法を、Zoom用にアレンジしたにすぎません。オンラインの特性を活かし、対面とは違う次元の授業手法を模索する動きがあり、それも一理あります。しかし、特別なことをしなくても、授業の質は保てるのではないのでしょうか。

以降、秋学期の科目「グローバル化と日本人」で独自に採った終講時アンケート結果を紹介します。

■ 課題負担：適量で役立つ課題なら有効

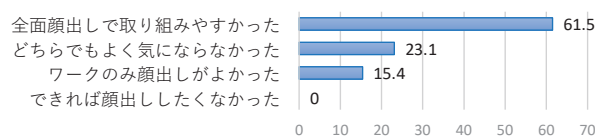
遠隔授業になり、課題の負担が多くなったことが問題になっていますが、当該科目では小レポート（1時間程度で書ける）を毎回課しています。その役立ち度は下図の通りで、9割近くが役立ったと回答しています。

自由回答には「授業が記憶に残りやすい上に新たな考えも生まれる」「(フィードバックの際) 他者のコメントを読んで理解が深まった」とありました。なお、本科目の授業外学修の週平均は1.2時間でした。新たなリサーチの必要がなく、授業を振り返り考えをまとめる程度の課題で、かつフィードバックもあれば、毎回課しても大きな負担にならず、学びの定着・深化に役立つということでしょう。



■ 顔出しの是非：授業形態で判断すべき

原則、顔出しで授業を進めたことについて、履修生の反応は下図の通りです。加えて、今後も遠隔授業が続く場合、顔出しすべきか訊いたところ、受講者数や授業形態（講義中心・双方向）により判断すべきが84.6%を占めました。



「お互い顔が見えるほうが積極的に参加できる」とのコメントに代表されるように、双方向のやり取りが多い授業では、相手が見えるほうが、仲間意識や信頼関係を醸成しやすく話しやすくなります。

一方、履修人数が多くなると通信が重くなるなどの意見もありました。実際、約3割の履修生が通信障害を経験していました。幸い、ビデオをオフにする、アクセスし直す、受講する部屋を変える等により、大きな支障は出ませんでした。学生たちの様々な科目の受講体験を総合すると（通信環境によりますが）、50名以下なら顔出ししても支障はなく、100名以上では通信障害が起きやすいようです。